

論文

英語eラーニング授業の問題点と その対応策例

大味 潤

What are Effective Solutions for Problems in English e-Learning Classes?

OOMI, Jun

Abstract

Two decades have almost passed since e-learning appeared in the academic and business environment both in Japan and United States. However, we have not seen so many successful cases yet because of different problems in the two environments. A particularly negative view is there can't be any successes when trying to incorporate any new technology into education.

The author has taught e-learning English classes for five years and encountered and solved various problems. By trial and error, he has finally developed an effective teaching method for the classes. He would like to share his experiences and solutions with his fellow teachers in the same field.

要約

eラーニングが登場して十数年が経過しているが、成功例は未だ多くはない。企業向けや学校向けの内容それぞれに様々な要因が考えられているが、そもそも新しいメディアを活用した教授法は、成功した事例が無いとする指摘もある。筆者もクラス単位での英語eラーニング授業を担当して5年が過ぎ、この間に色々な問題点と向き合いながら、実に様々な対処法を試みて来たが、その試行錯誤の中で徐々に授業として安定した形式となり、ようやく一定の成果を上げて来るようになった。今回はその成果をまとめて研究報告とし、この分野の発展の一助としたい。

「e-Learningという言葉が人口に膾炙して既に久しくなりますが、成功例はなかなか見出されないのが実情です。」
(e-Learning 教育学会 HP より)

「e-Learningが、人類が1000年以上にわたって築き上げてきたキャンパス教育に新しい教育環境をもたらす新しい教育パラダイムであることは明らかである。しかし、その歴史は浅くe-Learningを含めた新たな教育体系の姿は未だに見えていない。」

(日本e-Learning学会HPより)

1. 「eラーニングの歴史と定義」

1.1. 「遠隔地教育とeラーニングの歴史」

米国での遠隔地教育は地理的・制度的に広大な面積を網羅しなければならず、その配信技術に印刷教材の郵送、ラジオ・テレビ放送、衛星通信を含め100年以上の歴史がある。しかしその在り方はアジア諸国のように国家単位で管理するものではなく、寧ろ地域別に多様な姿で発展して来ており(吉田2003)、その中で僻地教育や学校教育を補う手段、また成人の職業能力向上の手段として貢献して来た経緯がある。遠隔教育第1世代の印刷教材やラジオやテレビ等の放送メディアを加えた第2世代に続き、1990年以降の第3世代で逸早くインターネットを利用したのは、米国はこれら遠隔地教育の主体が唯一特定の教育団体に委ねられていたのではなく、既存の大学や地域の教育機関、企業、放送局、各種コンソーシアム等が担っていたからである(菅原2005、鄭他2006)。また軍用技術研究と兵隊の訓練課程での視覚教育の為に、軍隊が早期にWBT(Web Based Training)の原型を作り遠隔地教育の一端を担っていたことも、米国でのeラーニングの特殊事情として注目すべきである(菅原2005、坂手2000)。

米国では1996年にクリントン政権での「ITリテラシーへの挑戦(Technology Literacy Challenge)」というIT教育政策が始まり、1999年に発足した「WEB-Based Education Commission」が2000年12月発表した「The Power of the Internet for Learning」というIT教育プランの提言によりインターネット関連のインフラ整備が急速に進み、大学や大学院、そして高校での教育へと応用された。尚「e-Learning」という用語が初めて登場したのは「TechLearn1999」学会であるが(川口2002)、eラーニングが特に大学で人気を高めたのは、米国の国内事情として25歳から50歳までの社会人学生が多かったせいだとされている。事実B to C(Business to Consumers)の学校教育よりB to B(Business to Business)の企業教育の方が普及は早い。これはナレッジマネジメント(Knowledge Management: 知識管理)、コンピテンスマネジメント(Competence Management: 能力管理)、ラーニングマネジメントシステム(Learning Management System: 学習履歴管理システム)等の企業内管理がeラーニングで行うのに適合していた為である(松山2001、森田2002、先進学習基盤協議会2003他)。但し日本国内で問題となる、青少年の社会化の場としてeラーニングが適当かどうかの議論は、上述のように米国では元々社会人教育として行われていた為には不要だったことが留意されて良い(吉田2003)。

これに対し日本国内では、1994年度から始まった「百校プロジェクト」、そして5年以内に世界最先端のIT国家になることを目指した2001年の「e-Japan戦略」によるインターネットインフラ整備が大きい。ちなみに日本では一般的に2000年がeラーニング元年とされている。ここでは

人材育成の強化として特定分野のIT人材の育成、並びに国民の情報リテラシーの向上がその目標として掲げられていたが、この後2003年の「e-Japan 戦略Ⅱ」でその利活用を、2005年度の「IT政策パッケージ」では問題点の克服と利活用の更なる促進がその目標となり続いている。日本のeラーニングでも企業の動きが先で、大学等の教育機関は遅れて始まっている（eラーニング白書2007/2008年版、森田2002、菅原2005等）。また日本では遠隔地教育の授業需要が大学に余り無いことを承知の上で、制度先行の政府主導で始まったことも指摘しておきたい（吉田他編2005）。

1.2. 「eラーニングの定義」

eラーニングの定義については専門家間でも意見が大きく分かれている。初期のRosenberg（2000）による狭義の定義が良く知られているが、これは企業内教育の視点から考えられたもので、eラーニングがこれまでの学習や教育と根本的に異なるべきであるとするものである（松田他2007）。以下中野（2002）の訳を引用する。

eラーニングとは、知識とパフォーマンスを高めるために、インターネット・テクノロジーを利用してさまざまなソリューションを提供することである。それは、次の3つの根本的な条件を満たすものである。

1. eラーニングはネットワークを利用するので、教育内容や情報の更新、保管、検索、配布、共有が即時に可能である。この機能は非常に重要で、eラーニングの「必要絶対条件」となりつつある。
2. eラーニングは標準的なインターネット・テクノロジーを使い、コンピューターを介してエンドユーザーに届けられる。
3. eラーニングは、学習というものを非常に広い視野でとらえ、従来のトレーニング重視の考え方の限界を超えた解決方法を提供するものである。 (pp.25-26)

他の定義では「eラーニングとは、情報通信技術を教育活動に利活用することであり、対面授業のよさを確保することに留意しつつ、対面授業でできなかった学習効果をも追及する新しい教育抱負によって実現する学習のことを指す。」（デジタルコンテンツ協議会2008、pp.6）、「e-Learningとは、ICT（*筆者注 Information and Communication Technology）を使ったインタラクティブ性のある環境のもとでの学びであり、『学びたいときに』『いつでも』『どこでも』かつ双方向的なサポートのもとに学習することができる教育情報システムのことである。」（河村2009、pp.25）、「学習者中心のフレキシブルでインタラクティブな環境の中で、情報や教授内容を伝達し、多様なスタイルの学習を支援するインターネットやデジタル技術を活用した学習システム」（鄭他2006、pp.17）等がある。さらにeラーニング白書2007/2008年版では、総合的な定義として次のように述べられている。

eラーニングとは、情報技術によるコミュニケーション・ネットワーク等を活用した主体的な学習である。これは、集合教育を全部または一部を代替する場合、集合教育と組み合わせて利用する場合がある。コンテンツは学習目的に従って作成・編集され、コンテンツ提供者と学習者、

さらに学習者同士の間で、必要に応じてインタラクティブ性が確保されている。このインタラクティブ性とは、学習を効果的に進めていくために、人またはコンピューターから適切なインタラクションが提供されたり、双方向コミュニケーションが実施されたりすることを指す。(pp.11)

またこれに関連して同書では、eラーニング利用授業の分類として、その目的や対面授業の有無との関連で、以下の4種類が挙げられている。

- Aタイプ：eラーニングの受講によって単位・資格を取得できる まったく通学しないという例は少なく、スクーリングが一部必要になる場合
- Bタイプ：同期型eラーニングと対面学習とのブレンドによる受講で単位・資格が取得できる
- Cタイプ：非同期型eラーニングと対面学習とのブレンドによる受講で単位・資格が取得できる
- Dタイプ：単位や資格の取得が主目的ではなく、一般向けの公開講座や組織内の自己啓発などでeラーニングを何らかの形で取り入れている (pp.92)

いずれの場合もeラーニングが旧来の対面授業に完全に取って代わるという考えではなく、ITの双方向コミュニケーションの利点や時間や場所を問わない利便性を生かすべきであるという態度が見て取れる。尚eラーニングとCAI (Computer Assisted Instruction) やCBT (Computer Based Training) との差異を強調して、定義には双方向の交流を含むべきであり「単に情報を配信するだけではeラーニングとは言えない」とするものもある(森田2002等)が、この場合でも必ずしもチャット機能のような同時双方向性に限定しているものではなく、教材内容についてメール等での質問が可能なら一応eラーニングの範疇に収まる様である。また「training」(訓練)ではなく「learning」(学習)であるのだから、学習者中心のみならず受講者が積極的主体的に学ぶ態度が何より不可欠だとする考え方もある(荒木2002、吉村2001)。

このように学習環境に何を想定しているかによって、定義はかなり異なる。実際に大学や企業全体のシステムとしてeラーニングを実施しているところもあれば、大学の宿題にのみ課している個々のクラスもあり、どこからどこまでをeラーニングとするかについて線引きは難しい。

概して先駆的な取り組みを行った報告では、それが大学であれ企業であれ、それぞれ組織全体や社会への発信といった、包括的なシステムの理想的な定義付けを行ったものが多い(荒木2002、植野2003、玉木2003、生田目2002、森田2002、吉田他2005等)一方、対面でのクラス単位で導入した例は文献でもほとんど目にしない。しかも導入例が紹介された場合でも、1) 遠隔教育としてのライブ授業か、2) オンデマンドによる授業のように2つに大別されているのが実情である(デジタルコンテンツ協議会2008)。

無論、クラス単位での実践となる本報告でこのような包括的な定義を該当させることは難しい為、ここではeラーニングを「メディアを活用した教育方法のすべて」(岡本他、2014)と考え、これを英語教育として「何らかの形でメディアを活用した英語教育方法の全て」として以下述べて行く。

2. 「eラーニングの諸問題」

2.1. 「eラーニングの諸問題」

eラーニングの定義とその問題点を指摘したものに、先進学習基盤協議会（2003）がある。

「いつでも、どこでも、だれでも、自分のペースで学習できる」ことが、よくいわれるeラーニングの特徴である。しかし、裏を返せばそれは「いつでも、どこでも、やらなくて済む」ことでもある。また、eラーニングにかぎらず、通信教育は一般的に、とにかく孤独感に陥りやすく、学習を続けるモチベーションを維持することが難しいといわれている。これがeラーニングの成否を分ける最大のネックになっている。では、どうするか。まず必要なことは、この弱点を補うためのサポート体制である。個人学習とはいえ放任するのではなく、進度が遅れていれば督促し、成績が悪ければ矯正する。(中略) 学習の進みぐあいや目標達成度、成績などを管理する為に仕組みはさらに重要である。受講者個人にとっては、自分の学習が現在どこまで進み、設定した目標に対してどのレベルまでクリアしているのか随時把握することができれば励みになる。

(pp.9)

このような問題点を踏まえWBT単体でトレーニングを行うのは適切でも十分でもなく、様々な手法を組み合わせるブレンディッドトレーニング（ハイブリッドとも呼ばれる）としなければ有効ではないとする考え方も強い（先進学習基盤協議会2003、バーシム2006、三浦2001、吉田2003）。また後述のように、教員や学生との双方向コミュニケーションや、学習支援担当者によるメンタリングが必要不可欠とする見方もある（菅原2005、山崎2001、松田他2007、吉田他編2005）。

事実、eラーニングの失敗理由として、1) システム導入時の運営体制が整っていない場合、2) 目標設定が十分でない場合の2つが挙げられることが多い（デジタルコンテンツ協議会2008）。先に紹介したeラーニング白書2007/2008年版での利用授業分類のいずれの場合でも「各機関のeラーニングの推進体制は、予算、スタッフ、さらにeラーニングによる授業のノウハウの面などでまだ十分とは言えず、導入したシステムを教職員がうまく使いこなして効果を上げるにはまだ時間がかかると思われる」と付け加えられている。さらにeラーニングはネット上で展開する為に急速な淘汰が進み、結果として一流のコンテンツしか生き残らないだろうとする指摘もある（坂手2000）。

また多くの実践研究報告では、eラーニングにより企業内研修の大幅な予算削減を成し遂げた例を挙げている（先進学習基盤協議会2003、日本イーラーニングコンソーシアム2004、三浦2001、山崎2001、森田2002、吉村2001等）が、企業向けの内容では交通費、宿泊費、学習効率、業務を中止しなくて済むこと等がその理由なので、通学制の大学ではそれらの効果は期待出来ないだろう。

さらに森田（2002）は法律資格試験等の暗記内容が決まっている科目では遠隔教育は人を集められず、一方で文化・思想のような講師と対話が必要な対面授業科目の方が人気があると指摘しており、吉田（2003）でも米国高等教育の事情を基に、eラーニングは段階的な学習で答えが一

義的に決定される領域に向いており、他者の考えを理解させるようなりべラルアーツ科目には向かないと指摘している。また企業向けの内容であっても「対人関係とか交渉術とかプレゼンテーションといったものは、やはりインストラクターによるパーソン・ツー・パーソンの研修が効果的である」との指摘もあり（三浦2001）、理解や記憶を中心とした知識を重視する法令、技術、理念、方法などを学ぶ際に効果を上げやすいとされている（日本イーラーニングコンソーシアム2004）。いずれにしても「あらゆる場面で有用だという前提を排除する余裕が必要」（吉田他編2005）であると考える方が良い。

2.2. 「eラーニングの長所と短所」

以上まとめると、eラーニングの長所とは、A) 場所・時間の制約が小さく遠隔地教育も可能、B) 異なるペースやレベルの学習者に同時対応が可能、C) 自主学习や繰り返し学習が可能で教員への依存が軽減、D) 多人数に対応出来て低コストで済む、等が挙げられてきた。広義においてはさらに、双方向コミュニケーションの実現、個別指導の実現、教材更新の即時性、指導レベルの標準化等を長所として加える場合もある（森田2002、荒木2002等）。

一方でその短所は、1) ネットサーフィン等のコントロールが困難で不正や問題行動が起きやすい、2) 学習する緊張感やモチベーションが保てない、3) 学習者の孤立（教員やクラスメートとの乖離）、4) 教材の難易度が低く内容が平易、また5) 時間的な制約がない場合「いつでもできると思うからいつまでもやらない」（先進学習基盤協議会2003他）となる可能性がある。加えて企業向けの場合は、業務中に行うことが多い為に時間が確保出来ないことも頻発すると言われ、実際に坂手（2000）によるネット調査では成人男性の74%、成人女性の69%がeラーニングに時間が取れないと回答した。反対に学校向けのプログラムでは、「黙ってよい子にしておけば眠っているうちに知らないところから『単位のプレゼント』がもらえるのではないかと考え」何も学習しない「サンタのプレゼント待ち」現象が起きると言う（吉田他2005）。

学習者にしても彼らが所属する学校や企業にしても、ことeラーニングに関しては「結局、多くの組織は学習する文化を持っていないのである」（バーシン2006）ので、そのような学習文化を構築することが肝要である（植野2007、日本イーラーニングコンソーシアム2004）。実際に初期のeラーニングに於いては「60%以上のドロップアウト率に苦しんでいた」（バーシン2006）との報告もあり、そもそも新しいメディアを活用した教授法では、一概にその有効な活用の開発まで時間が掛かることが多く、成功した事例が無いとする指摘もある（岡本他2004）。菅原（2005）は企業向けの追跡調査で様々な問題点を指摘した上で、旧来の集合教育と比較した際の利点が不明確であることがその最大の問題だとしている。

さらに6) 初期設定に関する膨大な時間負担とそれに対して教員への金銭的補償が無い（吉田2003）、7) 教員や教材が旧態依然で既存の紙教材との違いが少ない、8) 対面授業として行うとeラーニングの意義が補助的になる（eラーニング白書2007/2008年版）等を考えた時、授業単位としてのeラーニングはそもそも困難であることを認めざるを得ないのだが、筆者の様に好むと好まざるとに拘わらず授業を担当することになった教員の為、今回の発表では6)～8)の欠点を踏まえた上で、企業向けの問題を除いた残り1)～5)の問題点について現状改善を目指した対処法の提言をしたいと思う。では実際の対処法を述べる前に当クラスと教材について説明しておき

たい。

3. 「授業実践内容」

3.1. 「クラスと教材について」

今回紹介するのは、筆者が担当した4年生大学社会科学系専攻1年生対象の英語eラーニング授業である。これは通年の必修授業でクラス規模は40名弱。プレースメントテストにより学生のレベルは一応揃えられているが、筆者の主観的な感想でも、学期途中の7月に全員に受験させたTOEICのスコアを参照しても、クラス内での学力差はかなりあったと見ていい。再度断っておくが、ここで紹介するeラーニングはあくまでクラス単位のものであり、大学全体で運営するような包括的eラーニングではない。

教材はALC社のスーパースタンダードコースと英文法コースの2つである。スーパースタンダードコースではリスニング教材とリーディング教材（各50ユニット全レベル）とTOEIC演習問題（リスニング、リーディング問題各6回分）の3つを使用し、英文法コースではレベル別学習のレベル2と3（各48ユニットで計96ユニット。尚、英文法コースには随所に復習用のまとめ問題がある）を使用した。これらは大学が指定した複数の選択肢から筆者が選んだものである（教材選択は大学が契約したものの中から教員に一任されている）。

また当クラスでは、これら教材学習の確認テストを掲載するサイトとして当校の英語科が作成したMoodleを使用している。ALC各コースにも確認テストは含まれており、またMoodleサイトに専任教員が作成した問題もあったが、色々と不備があったり使い勝手が悪かったりした為、筆者が独自の問題を作成した。詳細は後述するが、1ユニットにつき5問ずつ設定し、スーパースタンダードコース用500問（リーディングユニット50課×5問で250問+リスニングユニット50課×5問で250問）、英文法コース用480問（96課×5問）の計980問、旧バージョン用の問題や予備問題を含めると計1200問以上を作成している。

このクラスでのeラーニングの前提としては「授業内容やテスト並びに宿題も全てオンラインメディアによる自主学習とする」とした。つまり教員は授業を行わず、管理者及びファシリテーターに徹する。これは先に挙げたeラーニングの長所である「異なるペースやレベルの学習者に同時対応が可能」、「自主学習や繰り返し学習が可能で教員への依存が軽減」、「多人数に応出来、低コストで済む」等を活かす為である。

3.2. 「クラス運営による対処」

クラス運営に当たっては、上記の通り授業を自主学習の場として捉え、学生は各自のペースで当日の学習メニューをこなすこととした。学習メニューは前週までにオンライン上に公表するので、学習者は必要に応じて事前の予習も可能である。また教員自身を管理者並びにファシリテーターとして位置付けた為、授業内での教員の発言は連絡事項や諸注意等最小限に留め、学生が学習に最大限時間を割く様に配慮した。これはeラーニングでは教員としての役割より学習支援者としての役割が大きくなるからである（吉田2003）。ちなみに遅刻や無断早退は最初のテストで授業を開始、最後のテストで終了することによって予防し、その対処としている（表1参照）。

表1 教室活動

時間配分	学習作業メニュー	作業・解答時間	学生の動向
000-015	英文法テスト（15問）	15分/15分	
015-035	聴解教材2課分	20分	宿題の文法教材やTOEIC演習を並行して行う者が多い
032-035	結果・成績発表1回目	（3分）	
035-050	聴解テスト（10問）	10分/15分	
050-110	読解教材2課分	20分	宿題の文法教材やTOEIC演習を並行して行う者が多い
107-110	結果・成績発表2回目	（3分）	
110-125	読解テスト（10問）	10分/15分	読解テストの解答が終わるとそのまま退室する者が多い
125-130	質疑応答その他	5分	
	次回までの課題：英文法3課分＋「英文法のまとめ問題1つかTOEIC演習の読解か聴解のうちの1つ」		

問題点1) で考えられる不正行為は、具体的に以下の4通りである：a) アクセスがあれば教室外で解答が可能、b) その際他人が解答可能、c) 教室内でも他の学生の画面から答えの丸写しが可能、d) スマホ等により別画面で本文や解説を表示しての解答が可能、である。a) とb) に対しては教室以外からのサイトへのアクセスを不可と設定し、欠席の場合や教室不在の際に得点がされていても全て無効とした。c) には出題・選択肢共ランダムに表示することで対処し（以下参照）、d) にはテスト中に巡回をしたり後方から監視したりするアナログ式の対処を取った。尚、違反があった場合は、その違反内容、違反者の学籍番号、処罰内容等をクラスのオンライン掲示板にて公示した（10点満点のテストに対しマイナス30点を課した）。

問題点2) の単調な授業で学生のモチベーションが低下することに対しては、各課題確認テストを毎授業定時に3回行うことで20分毎（成績発表までは17分毎）のリズムを作らせ、効率良くメニューをこなせば宿題も授業内に消化出来るようにし対処している。学生は少しでも速く聴解・読解教材をこなし、宿題である英文法教材やTOEIC教材に取り掛かりたいので、授業中に遊んでいる学生は皆無であり、当然その作業効率も高かった。これにより問題点5) 「いつまでもやらない」も同時に解決されている。尚「学習者が画面に集中出来る時間は約16分」（森田2002）や、「1セット15分程度にまとめられたコンテンツにするとよい」（日本イーラーニングコンソーシアム2004）という報告もある為、この時間配分が偶然ながら理に当たっていたようである。

ちなみに当クラスの成績は、確認テストでの得点に課題の終了率を掛けたものである。その為、何らかの理由で課題を終えないままテストを受験することは可能だが、学期末の成績算定までに、結局はやり残しの課題をやることになるので、忌引きや病欠の学生も含め、最終的な課題終了率はほぼ100%となっている。

ネットサーフィンを禁止すると、教員デスクによるモニター機能でその違反は監視可能であるが、そのチェックに費やす時間や労力に対して結果が見合わない為、閲覧内容が公序良俗に違反しない限り許可した。尚、ケータイやスマホ等の携帯端末の使用も、テスト時間以外は原則自由としたが、上記の理由により使っている学生はほとんどいなかった。尚、企業に於いてはeラー

ニング中でも業務を並行して行う問題や、授業の関連項目を調べる為にネット使用を禁止出来ないといった問題も報告されているが（吉田2003）、無論当授業では該当しない。確かに他の授業の課題等を行っていた者もいたが、後述するように最低得点ラインがある為、eラーニング教材と並行しながら行っているか、もしくはeラーニング教材を既に予習して終えていたかのどちらかで特に問題は見受けられなかった。

問題点3)の学習者が孤立してしまうことに関しては、授業中の私語を可として対応した。これだけでは雑談ばかりで学級崩壊にも繋がりがかねないよう思えるが、授業最初に行う英文法テストの直後に聴解のユニットを課していた為、学生はテストが終了すると各自そのままヘッドフォンをしたので私語は自然と消え、クラス全体が静かになった。

一方でテスト結果は即時公開、同時に暫定成績も公開することにより、各自のクラス内での成績順位を確認させ、同級生間でのライバル心を喚起している。この際、Moodle画面によりクラス全体の成績を棒グラフで、又テスト結果を算入した暫定成績はEXCEL画面により成績順に学生番号で表記している。

成績の発表は1回の授業に付き2回、聴解テストと読解テストの各3分前に設定した。その理由はその時間までに学生は該当の教材を終えて一息ついている為と、直前のスコアと成績順位を確認することで引き続き緊張感を維持させる為である。この際、教員は最高点、最低点、満点得点者の人数、失格者（最低得点ラインに満たず0点になった者）の人数を口頭で伝えている。ちなみに授業中にクラス全体で学生達の感想や話し声が聞こえるのはこの各3分間のみである。

また学生は挙手によりいつでも教員を呼べるようにしてあったが、主な用件は基本的なPC操作やネットの接続不良に関するものが9割で、各ユニットの内容や英文法に関するものは1割にも満たなかった。ちなみに荒木（2002）でもeラーニングの終了率を上げる手段として「FAQやQ&A、競争心を喚起するためのテスト結果の順位表示などの仕組み」が挙げられている。

さらに理想的には、個人的にフィードバックを行う方が良いとされている（岡本他2004、松田他2007、日本イーラーニングコンソシアム2007等）が、時間的且つ人数的な問題もあり、クイズ終了時に点数に応じて自動的に表示される短いコメントを除き（以下参照）当クラスでは基本的に行っていない。尚、当大学では「英語アドバイザー」が常駐しており、eラーニングクラスの学生を対象に個別指導を行っていたが、これらアドバイザーは授業を担当している教員ではなく、ALC社から派遣されているスタッフであった。クラスによっては学生を順に1人1人送り込んでいたようだが、当クラスでは出席不良や不正行為を除き授業に付いて来られなくなった学生はいなかった為、4月のコース開始時に学生にスタッフを紹介するに留め、クラスとしての利用は行わなかった。

3.3. 「設問による対処」

問題点4)の教材の難易度が低く内容が平易、への対策であるが、先述のように教材内容は選べないので設問を工夫することで対処した。ここで参考にしたのは、筆者が留学時に会った米国のオンライン自動車学校の教材である。これは違法駐車や速度超過等の交通違反に対し、罰金を減額する代わりにオンラインで交通法規を再度学ばせるサイトであるが、受講者はいずれも自動車免許取得者である。となれば教材を読まずとも正解が可能な為、通常交通法規の問題をそ

のまま出題したのでは、実際にサイトで交通法規を再度学習したかどうか問えない。これに対しサイトでは、道路交通法を解説する文章10～20ページ程度の途中に全く無関係な文（レーガン大統領の出世作、マリリンモンローの誕生日等）を紛れ込ませ、確認テストでそれについて正解出来なければ、課題を読んでいないと判定し1ページ目から教材を全てやり直させていた。

大学1年生の英語力であれば、文法問題等は教材を読まずに解答が可能であり、残念ながら読解や聴解問題も選択肢の設定が甘い場合には、常識の範囲で正解に辿り着くことが可能である。これは上記の交通違反者に道路交通法の問題を解答させるのと類似している。その為、当授業の確認テストの問題は、教材を十分に読まなければ解答不能の問題を作成した。無論、教材と全く無関係な映画情報やスターの誕生日等を出題する訳にはいかないため、本文中の単語や教材内の注や解説等から出題した。すなわち既存の知識だけでは解答が著しく困難なので、自然と教材に取り組むよう仕向けた設問を作成したということである。必然的に当授業では、紙類に限りメモを取ることでテスト中のそれらの参照を許可した。それでも学習単元に取り組むこと無しにテストを受験し端数の点でも得ようとする者がいた為、6割未満の得点の場合には、学習をしていないものとして全て無効とした。後述の通り、結果的にこれが一番功を奏することになる。

では以下、数例の学習単元と、上記の条件に従って作成した問題並びに解答を、読解、聴解、文法からそれぞれ紹介したい。

3.4. 「確認テストの設定」

三浦では（2001）eラーニングのクイズテストの作成に関する要点として、1）選択肢と問題のランダム出題、2）メッセージによるフィードバック、3）解答時間制限、4）教員によらない自動採点、等を挙げているが、当授業でもこれらに留意し作成している。では以下、個別に説明していきたい。

1) 選択肢と問題のランダム出題は、Moodleの設定により容易に行えるので、英文法に関してはそのまま行った。しかし読解と聴解問題はそれぞれ2課まとめて出題する為に、問題のランダム出題をするとどちらの課の問いなのかが不明確になり、解答の際に混乱する為、選択肢のみのランダム出題とした。

尚、選択肢は全問で必ず4つとした。これは曖昧な記憶では解けないようにする為である。しばしば見受けられる市販教材での選択肢は正解そのもの（例：AはB）と、正解の前半を変えたもの（例：CはB）と、正解の後半を変えたもの（例：AはD）のような3択となっており、選択肢だけ見ればAが2回、Bが2回ずつ現れているので、当然「AはB」という正解が自ずと導き出せるものが多い。これに対し当授業では、全てを組み合わせた4つの選択肢を作ることで論理的な絞り込みをなくした。すなわち「AはB」「AはD」「CはB」「CはD」としており、もはや確率で絞り込むことは出来ないため、自ずと教材をしっかりと理解しなければならなくなるということである（問題例2参照）。

2) メッセージによるフィードバックは正解率により以下の5通りとなっている。

100% : Perfect!!! You are GREAT!!! ; -)

90%以上 : Almost perfect!! Just a little more!! ;)

75%以上 : Excellent! You did a very good job!

60%以上： This is fair enough! Good luck next time!

60%未満： What's wrong? Do you need some help?

尚、当日の成績が非常に優秀だったり、逆に著しく不出来だったりした場合は、成績発表時や授業終了時に教員が個別に声を掛けることを時折行っていた。

3) 解答時間制限は1問につき1分とした。英文法は15問あるので15分で、読解と聴解は10問あるので10分である。無論、早く終わることは出来るので、ほぼ全ての学生が終了時間前に終わっている。また異なるペースの学習者に対応する為、解答可能時間枠は全て15分に設定しており、学生はその中の10分を使って解答する。速く始めたい学生は開始と時間と同時にテストに取り掛かり、ギリギリまで確認していたい学生や学習速度が遅い学生は、解答時間が残り5分くらいでテストを開始していた。しかし英文法だけは遅刻防止の為に授業開始同時に始めることとしており、読解や聴解と異なり文脈を考慮する必要が無く解答が速い為、余分な時間は設定していなかったが特に問題は無かった。尚、時間超過の際は、その時点での正解数をカウントし得点とした。

4) 教員によらない自動採点も Moodle そのものの設定により容易に行うことができる。但し、問題によっては単に正解と誤答の2種類ではなく、部分点が付く答えも用意した。これは一つには英文法の揺れの問題があり、文法のルールを厳密に解釈すれば間違いになるが、用法としては英語の母語話者間でも許容される表現がある為である。読解や聴解問題でも同様で、内容の解釈によって正解の幅を作っている。また生きている言語を学ぶ学習者に唯一無二の正解探しに慣れて欲しくなかったこともあり、正解が2つ以上の問題も設定した。知識を深く理解させる為にも、選択肢を眺めてどれを正解にすべきか熟考して欲しい為である。

尚、配点は1問につき1点だが、設定上同一問題で2回までは解答出来るようにした。しかし1回目の解答で正解ならば1点だが、2回目の解答での正解は選択肢が減っているので得点は半分の0.5点とし、3回目以降は自動的に0点となる。当然ながら1回目の解答で部分点を取った場合、2回目は解答しない方が点数は高くなることとなる。

3.5. 「確認テストの作成」

A：「読解問題」

5問中3問が内容に関する設問で、2問が語彙に関する設問である。本文の内容に関する問題では、1) 話の主な内容に関するもの、2) 細部に関するもの、3) 本文に無い内容を選ぶもの、の3種類を設けた。基本的な考え方としては、各ユニットの大意を取ることを主とし、注釈にも目を通すよう促すものの、内容の枝葉末節には陥らないようにした。

以下の例は第22週目（後期8週目）の設問であるが、問題例1は会話の大意を捉えるもの、例2は内容の正確な描写が出来るかを問うもの、そして例3は本文に含まれていない内容を指摘する問題である。ちなみに本文の内容がイギリスの温暖化問題なので、下のような設問になっている。例1は「イギリス」が正解で「ロンドンのみ」の選択肢は部分点になる。例2ではAが正解であるが、事実を反対から描写することも出来る為Dを部分点としてある。例3ではロンドンオリンピックについては何も述べられていないので、Aが正解となる。この場合、部分点の答えは無い。

問題例1：What is the best summary of the content?

A：It's getting warmer in England. (正解)

B：It's getting warmer in Rome.

C：It's getting warmer in London. (部分点)

D：It's getting warmer in Athens.

問題例2：Which is true about pubs in London?

A：People usually sit outside in summer now. (正解)

B：People usually sit inside in summer now.

C：People usually sit outside in winter now.

D：People usually sit inside in winter now. (部分点)

問題例3：Which is NOT true about the content?

A：They prepared for Olympics very well. (正解)

B：There are many reports about greenhouse effect.

C：They produce good wine in England.

D：Newspapers in Britain don't mention any degrees over 30.

例4と例5は語彙に関する設問である。語彙に関する問題は英々辞典の形式を取っているが、辞書をそのまま引用すると難易度が高過ぎる場合や本文での意味から離れてしまう場合もあった為、本文の内容に近い意味になるよう修正してある。さらに1問では<>内に文字数がヒントとして添えてあり(例4)、もう1問では<>内に先頭の文字が添えてある(例5)。これは後述する聴解問題でも同じである。言うまでも無く、本文に無い単語を答えても0点なので、学生は自ずと本文全体に目を配ることとなる。

問題例4：_____ = ten years, many years <6>

(正解) decade, decades

問題例5：_____ = judgement, value, what people say about something/someone <r>

(正解) reputation

B：「聴解問題」

本来は聞いて答える聴解教材ではあるものの、ALCでは内容確認のページに本文が全て記載されている為、音声を開かなくても教材の確認テストは全問正解が可能である。その為、こちらで作成した内容確認の3問中1～2問は音声ファイルを開かないと解けない設問にしてある。概して聴解問題は男女1人ずつの登場人物が出て来ることが多いが、その音声から誰でも判断出来る話者の凡その年齢、話す速さ、声の高低等、明らかな特徴だけを取り上げ設問とした。これは先述の様に、教材の細かな点まで網羅させつつも、枝葉末節には拘らせない為である。

以下は第21週目(後期7週目)の設問で、会話の内容とその状況についての設問である。内容は無料メールのアカウント設定についての会話であるが、例6ではこの女性がそもそもアカウン

トを持っていないことから始まったのでAが正解。例7では2人の話者の関係が音声ファイルでもスクリプトでも判定出来ないのが、自動的にCが正解。また新年の挨拶のメールについての内容なので、問題例8ではAが一番妥当なので正解、Bは有り得なくはないが、12月と考えた方が妥当なので部分点としてある。例9と例10は先述の読解問題での例4と例5と同じ考え方である。

問題例6：How many free e-mail accounts did the woman have?

- A：None. (正解) B：One.
C：Two. D：Three.

問題例7：Who are the speakers?

- A：A mother and her son. B：A father and his daughter.
C：Not sure. (正解) D：An IT staff member and a female student.

問題例8：When does this conversation take place?

- A：In December. (正解) B：In January. (部分点)
C：In March. D：In July.

問題例9：_____ = mark, planet, top-level <s>

(正解) star, stars

問題例10：_____ = put in letters, write alphabets neatly, push keys <4>

(正解) type

C：「文法問題」

ここでは文法規則を知っているだけでなく、各ユニットの文法項目を復習して理解を深め、さらに微妙な正誤を判断出来ることを目標とした。先述のように大学生であれば、基礎的な文法事項は理解していると考えられるので、教材の主な論点や語彙の使い方等が理解出来ていなければ解きにくい設問にしてある。ここでの難点は各ユニットで注意すべき語彙や文法項目が多かったことで、その為に同一の設問に複数の項目を織り込んだ形式にして対処している。以下は第20週目(後期6週目)の設問で、不定詞と動名詞についてのユニットの例である。

問題例11では単なる動名詞の設問ではなく、文の内容からどちらかを完了形にしなければならぬよう仕向けた。前半が最初に起こったこと、後半はこれから起こることなので正解はAとなる。例12では動名詞にtoが付く例外的な文型を後半に組み込んだ。よって正解はAである。例13では文法規則よりも状況判断がカギとなる。文法的にはBも正解だが、状況から考えるとAのみが正解となる。例14ではAもDも正解だが「present」という語が入っている為、Aが間違い無く正解で、Dはそういう解釈も場合によっては可能なので部分点となる。例15では2箇所とも「no + ~ing」の構文だが、どちらがどちらの形を取るか分かっていたら、Aのみが正解と分かる。うろ覚えでは点が取れない典型的な例でもある。尚、下記の例では当てはまらないが、正解が2つ

ある設問もある。

問題例11：

I am sorry for _____ late this morning and apologize for _____ soon after this meeting.

A : having been, leaving (正解) B : having been, having left

C : being, leaving D : being, having left

問題例12：

I feel like _____ out to eat today. What do you say _____ me?

A : going, to joining me (正解) B : going, joining me

C : to going, to joining me D : to going, joining me

問題例13：

We got a part-time job as TOEIC staff, so we had to see the applicants _____ their tests for about three hours tomorrow.

A : finish (正解) B : finishing

C : to finish D : finished

問題例14：

She is very proud both of _____ her present job as a news caster and of _____ her last career as a news reporter.

A : having, having had (正解) B : having, having

C : having had, having D : having had, having had (部分点)

問題例15：

There is no _____ about your future too much. It is no _____ today, either.

A : worrying, use wasting (正解) B : use worrying, use wasting

C : worrying, wasting D : use worrying, wasting

4. 「学期末アンケートによる検証と考察」

年度末の終了単元としては、規定の教材は聴解・読解ともレベル1～5まで100ユニット全て(当大学のガイドラインでは20ユニット)、英文法コースは2レベル96ユニットを終了したが、後述のように学生側からの評価も高く、脱落率は約15% (10%が出席不良で5%が不正行為による処分)であった。それでは以下、具体的にアンケート項目とその結果を紹介しながら検証と考察を行いたい。調査は2014年度末の全授業終了後に行い、回収率は98% (2クラスで59名中58名)、評価は7ポイント評価で1「全然そう思わない」～7「全くそう思う」である。

4.1. クラスの雰囲気について

「問1」 クラスの自由な雰囲気の為には、何が良かったと思いますか。		平均
A	座席が自由に選べること	5.6
B	QUIZ時間以外は自由行動であること	5.8
C	飲食がOKであること	5.4
D	困った時には教員を呼べること	6.0
E	当日の課題がホワイトボードに書いてあること	6.3
F	成績が随時公開されること	6.3

解答はいずれも高い数値になっているので、学生がクラスを肯定的に評価しているのが分かる。しかし学生が一番高く評価したのはE「当日の課題がホワイトボードに書いてあること」とF「成績が随時公開されること」であった。これは教員の指示を待つ必要が無く自分のペースで学習の時間配分を決められることと、また学習の成果が暫定成績、クラス内順位と共に定時公開されていることを指している。一見すると「自由な雰囲気」と「成績の随時公開」は無関係に思えるが、教員に勉学を強制されているのではなく、学生個々人が自分の目標、つまり暫定成績から予想出来る目標成績を決め、各自がペースを調整しながら学習しているので矛盾しない。ちなみにこれはeラーニングに限らず、他の授業でも簡単に応用が可能であろうと思う。つまりその日の授業予定を明確にすることはホワイトボードその他に記述すれば可能で、一方成績の随時公開は前回までの成績をスクリーンに表示したり印刷して回覧させたりすれば良い。参考までに記しておく、筆者の他のクラスでも成績発表は毎週行っており、その結果学期末の成績に関するクレームはこれまで皆無に等しい。

4.2. 公平な評価について

「問2」 公平な評価の為には、何が良かったと思いますか。		平均
G	画面操作（スマホ含む）を禁止していること	5.7
H	教員が巡回すること	5.6
I	教員が学生のモニターをチェックすること	5.7
J	不正行為を処分（3倍の減点）すること	5.7
K	QUIZ解答時間が固定されていること	5.6

いずれ項目の数値もほとんど変化が無い。教員が工夫していたこれらの要素は学生にはほとんど影響が無かったのか、しごく当然の事と捉えられていたものと思われる。全項目において5.6～5.7点なので、やや肯定的に評価されていると考えても良いだろう。

4.3. QUIZを頑張れた理由

問3：何故QUIZを頑張ったのですか？	平均
L <文法> 受験英語の知識では解けない問題があるから	4.3
M <読解> 本文を読まないと解けない問題だから	5.5
N <聴解> 内容を耳で聞かないと解けない問題があるから	5.1
O <読解聴解共通> 英語の説明文に合う英単語を考えないといけないから	5.4
P <全問共通> 4択問題なので簡単に答えが絞り込めないから	4.9
Q <全問共通> 60%以上の正解でないと0点になってしまうから	6.3

ここではほとんどの問いに対して4点から5点台と横並びである。7点満点であることを考えるとやや肯定的に評価するものの、いずれも特に大きな要因にはなっていない。一方で唯一突出しているのがQ「60%以上の正解でないと0点になってしまうから」の6.3である。教員としては授業運営等に様々工夫したつもりだが、学生側からすれば60%未満だと0点の扱いになるという非常に簡単な仕掛けが一番の学習動機に繋がったようだ。これは見方を変えれば、教員側が細かな工夫を様々に凝らすより、最低許容範囲の得点（ボーダーライン）を決めてしまえば、学生側の学習動機は自ずと向上する可能性があることを示唆する。詳細は後述するが、学習科目や学習教材への興味、面白さとは相関関係には無く、単純に中途半端な得点を認めないとするだけで学習者の意欲や動機は上がる可能性が高く、結果として授業効率も上がる可能性が高い。

4.4. eラーニングを頑張れた理由

問4：e-Learningは面白い科目ではないのに、どうして最後まで頑張れたのですか？（複数回答可）	得票数 (58名中)	得票率 %
1 必修科目だから	50	86.2
2 教員のキャラ	28	48.2
3 クラスの自由な雰囲気	24	41.3
4 英語は必要だから	20	34.4
5 クラスの公平な評価	17	29.3
6 簡単に点が取れないクイズ	12	20.6
7 友達と会えるから	9	15.6
8 英語は好きだから	7	12.0
9 TOEICの為	6	10.3
10 教材面の面白さ	2	3.4

こちらは複数回答の為、各得票数の全体得票数に対する比率、すなわち得票率で表した。日頃見聞きする学生の反応から10の選択肢を用意したが、筆頭に挙がってきた答えは「1：必修授業だから」で86.2%を占めた。一見当然のようだが、該当クラスの学生は「ゆとり世代」最後の学生層で、他の必修授業を含め当たり前に落とす世代であるので、これは決して普通の結果ではない。

残りの選択肢はいずれも50%を切っているので左程重要では無く、「2：教員のキャラ」「3：

クラスの自由な雰囲気」がそれぞれ48.2%、41.3%で4割を超えている程度である。ここでも教員としての様々な工夫は功を奏してはいないようである。詳細は不明だが、少なくとも数値上は学生の意識には昇っていないようである。

4.5. クラス評価

「問5」このクラスは100点満点で何点?			
クラス	火曜日1限クラス	金曜日2限クラス	2クラス平均
平均得点	83.7	88.2	85.8

アンケート用紙の初めには、以下の様に記しておいた。

このクラスではe-Learning本来の長所を生かす為、学生一人一人が各自のペースで学習出来るようにしました。その為、課題を伝えるだけで教員は授業を行わず、教室の出入りや飲食を含め自由に過ごしてもらいました。普通ならクラスが成り立たない状況で、皆さんは何故か学習のみに集中し、全クラスでダントツの学習量をこなして優秀な成績で終わろうとしています。この「奇跡」の理由を教えてください。

五年前に当授業の担当になって以来、eラーニングの性格上、学生が満足するような授業を展開出来るとは到底思っていなかった。様々な制約の中で一教員に出来ることと言えば、eラーニング本来の長所を生かしそれを最大限広げることだと考え、試行錯誤を繰り返しこれまで述べたような授業運営をしてきたまでである。こちらとしては様々な点で過不足もあり、満足とは程遠かった。しかしそれを学生は好意的に受け止めてくれたようである。

5. 「問題点」

先にも述べた通り、一番の問題点は確認テスト1000問以上の作成に費やした膨大な時間であり、それに対する補償が全く無いことである。1クラス40人を2クラス担当する程度ならば、費用対効果としては全く割に合わない。筆者の実感としては最低10クラス以上、すなわち400人以上の学習者を対象とするのでなければ、確認テストをオンライン上に設定する必然性も、さらにeラーニングそのものの必然性も無いと感じた。これはeラーニングの定義や短所として各文献で述べられた通りである。さらに2年経過した時点でALCの教材が更新されてしまった為、確認テストの大部分を作り直す羽目になったことも付け加えておきたい。事実eラーニングという名称のクラスながら、終始紙媒体のみで授業を行いオンライン教材は宿題として課すのみとしていた教員も中にはいたようであるが、こうして見ると、残念ながらその方が理に適っていると言わざるを得ない。

また対面授業として教員と学生が一堂に会しながら、お互いに顔も見ない授業が果たして授業と言えるのか疑問であるし、国際化時代にコミュニケーション英語の必要が叫ばれる中、そして対人コミュニケーションが苦手になっている今の学生層にとって、パソコンのスクリーンに向き

合って英語を学ぶ意味がどれ程あるのかも甚だ疑問である。

6. 「終わりに」

設問の改善点としては、聴解教材に対する聴解問題、すなわち音声聞いて答える設問の開発と、不正行為をさらに防止する為の予備問題の作成である。聴解問題はこの場合 ALC 社の音声ファイルが必要となる為、今の所解決方法が無い。一方で予備問題はユニット数が多い為に、作成に必要な作業時間を考えると今の所まだ手が付けられていない。但し不正行為の摘発が毎年行われていることを考えると、公平な授業運営には必須であると思う。

尚、この大学では必修授業としての eラーニングは当該年度で終了し、次年度以降行う予定は無いと言う。今回の調査結果や考察は、また別の機会に役立てたいと思う。

引用文献

- 荒木浩二、「実践 eラーニング：競争優位に立つ最新手法と成功モデル」、毎日新聞社、2002
- 植野真臣、「知識社会における eラーニング」、培風館、2007
- 岡本敏雄、小松秀園、香山瑞恵、「eラーニングの理論と実際：システム技術から、教え・学び、ビジネスとの統合まで」、丸善、2004
- 香取一昭、「eラーニング経営：ナレッジ・エコノミー時代の人材戦略」、星雲社、2001
- 川口大輔、「Eラーニングとは」、『企業と人材』2002.11.20号、産労総合研究所、2002
- 河村一樹、「e-Learning 入門」、大学教育出版、2009
- 経済産業省商務情報政策局情報処理振興課編、「eラーニング白書2007/2008年版」、東京電機大学出版局、2007
- 坂手康志、「Eラーニング：教育のインターネット革命」、東洋経済新報社、2000
- ジョシュ・バーシン著、赤堀侃司監訳、「プレッティッドラーニングの戦略：eラーニングを活用した人材育成」、東京電機大学出版局、2006
- 菅原良、「eラーニングの発展と企業内教育」、大学教育出版、2005
- 先進学習基盤協議会/編著、「eラーニングが創る近未来教育：最新 eラーニング実践事例集」、オーム社、2003
- 玉木欽也、小酒井正和、松田岳士共編；青山学院大学総合研究所 AMLII プロジェクト著、「eラーニング実践法：サイバーアライアンスの世界」、オーム社、2003
- 鄭仁星、久保田賢一編、「遠隔教育と eラーニング」、北大路書房、2006
- デジタルコンテンツ協議会、「eラーニング：実践と展望」、産業図書、2008
- 中野広道、「eラーニング戦略」、ソフトバンクパブリッシング、2002
- 生田目康子、「みんなの eラーニング：体験的授業改革論」、中央経済社、2002
- 日本イーラーニングコンソシアム編、「eラーニング導入ガイド」、東京電機大学出版局、2004
- 日本イーラーニングコンソシアム編、「eラーニング活用ガイド」、東京電機大学出版局、2007
- 日本 e-Learning サイト、「発足にあたって」、<http://hwm7.spaqs.ne.jp/jela-npo/>、2015
- 松田岳士、原田満里子、「eラーニングのためのメンタリング：学習者支援の実践」、東京電機大学出版局、2007
- 松山幸弘、「アメリカの教育改革から学ぶこと」、富士通総研経済研究所、研究レポート、106、2001
- 森田正康、「eラーニングの「常識」：誰でもどこでもチャンスをつかめる新しい教育のかたち」、朝日新聞社、2002
- 三浦邦夫、「eラーニングの導入法：仕組みがわかる活用法がわかる」、日経連出版部、2001
- 山崎将志、「eラーニング：実践的スキルの習得技法」、ダイヤモンド社、2001

吉田文、「アメリカ高等教育におけるeラーニング：日本への教訓」、東京電機大学出版局、2003

吉田文、田口真奈、「模索されるeラーニング：事例と調査データにみる大学の未来」、東信堂、2005

吉田文、田口真奈、中原淳編、「大学eラーニングの経営戦略：成功の条件」、東京電機大学出版局、2005

吉村克己、「eラーニング：成長する『個人』発展する『組織』」、エイチアンドアイ、2001

e-Learning教育学会サイト、「会長挨拶」、<http://www.mle.cmc.osaka-u.ac.jp/WELL/>、2015

Rosenberg, M., "E-Learning : Strategies for Delivering Knowledge in the Digital Age", McGraw-Hill Companies, Inc., 2000.